＜七転び八起＞

事件記者、特派員、政治部記者などのキャリアを歩んで来られたキャスターの小西美穂氏に、これまでの「七転び八起」の人生を語っていただきました。以下、内容の概略です。

―女性初の大阪府警の担当記者としてキャリアをスタートした後、女性初の司法担当記者として配属される。経験も知識もないため、がむしゃらに勉強しながら日々奮闘するうち、大きなチャンスが到来。ある異色な経歴を持つ女性弁護士（大平光代氏）のドキュメンタリー番組を手掛け、大きな実績を残すことになった。
次に、読売テレビでは女性初の海外特派員としてロンドンへ赴任したが、経験も少ない自分には取材のチャンスが回ってこない状態に置かれる。その中、いつか次のチャンスに繋がる「自分にしかできない仕事」をしたいと願いながら、コツコツとためていたデビッド・ベッカム選手のネタが大好評を博し「小西さん、また取材に行ってきて。」と声をかけられるように。ずっと願ってきた「自分にしかできない仕事」となっていた。
そして、本流への大チャンスとも言えるイラク取材へと繋がっていき、危険な戦争紛争地での自衛隊の活動や、現地の女性や子供たちが困窮している状況を取材、報道することができた。
海外特派員を終え帰国後、日本テレビへの出向で未経験の政治部へ配属の後、ニュース番組の討論コーナーで女性初の司会者に抜擢される。しかし、初回放送の翌朝からクレームが殺到し大打撃を受ける。それでも、自分のスタイルを貫きながら懸命に努力した結果、率直に疑問をぶつける新鮮さが持ち味として次第に支持されるようになった。
その後、大学院でジェンダーについて学び直し、大学で教鞭をとるようになり、現在に至る。―

小西氏が、「初の女性」として数々のキャリアを積んできた自身の人生を語る中で、常に一貫して言われていたことは、「与えられた仕事は出来ないと尻込みせずに、前向きに懸命に努力する。それがたとえ遠回りになっても、いつか必ず大きなチャンスとして開けていく。」という姿勢でした。そして、実際にその通りにチャンスを掴んで来られたお話をユーモアも交えながら楽しく披露していただき、リラックスした雰囲気の中、質疑応答も活発に行われました。
参加者からは「自分しかできないこと（仕事）、目の前のことを一生懸命やることなどポジティブ志向に元気をもらった。」「華やかなお仕事をされているように見えて今まで苦労されたり、悔しい思いをされてきたことがとても心に響いた。」「努力することへの背中を押された感じがした。」「質疑応答も楽しかった。」といった感想が寄せられました。